

情報社会の国力向上が必須



月尾 嘉男

「歴史は繰り返さないが韻を踏む」。情報社会の状況は19世紀初期にイギリスで発生した「ラッダイト運動」を連想させる。新規の技術を導入することに対する反抗は一部からは歓迎されるものの歴史を回顧すれば長期にはマイナスになる。やはり新規の技術を導入した社会への移行が必須なのである。

社会に急速に浸透しつつある人工知能（AI）が

最初に研究対象になったのは1956年のダートマス会議とされ、その後、何度も浮沈があったが、2022年にオープンAIが「チャットGPT」を、翌年にグーグルが「ジェミニ」を発表し、素人でもAIの能力を容易に利用できる環境が登場し、一気に社会現象になってきた。

これを加速したのがオープンAIの社員であったアモデイ兄妹が独立して創業した「アンソロピック」という企業が2023年に発表した「クラウド1」「クラウド2」というAIである。これは人間の指令なしにコンピュータに入力された情報内容を理解し、報告の作成や経理の処理を自動

で遂行する能力を保有している。

さらに今年1月に「クラウド・コワーク」という機能が発表され、これが衝撃をもたらした。コンピュータのディスクに記録されている多様なファイルを整理し、その内容を分析して要約レポートを作成するだけではなく、2月には企業の業務に対応した能力を自力で開発し、既存のシステムにプラグインすることを可能にすると発表している。

チャップリンの映画『モダン・タイムズ』（1936）では自動機械の巨大な回転する歯車が人間の肉体労働を翻弄する有名な場面があるが、これは工業社会の根底にある人間と機械の問題を象徴するものであった。

しかし「クラウド・コワーク」が代表するAIが示唆する内容は情報社会の人間と情報技術の関係を再考させる状況である。

児童文学の傑作『トム・ソーヤーの冒険』で著名な一九世紀のアメリカの作家M・トウウェインに「歴史は繰り返さないが韻を踏む」という有名な言葉がある。歴史には同一ではないが類似的事例が何度も発生するという意味であるが、ここまで紹介した情報社会の状況は19世紀初期にイギリスで発生した「ラッダイト運動」を連想させる。

自動織機など人間の労働を不要にする機械の浸透により社会に大量失業が発生し、それに反抗する職工が失業の元凶である機械を破壊した活動で、扇動した何

人かは死刑や流罪になって一旦終焉した。しかし20世紀終盤になり、情報技術の急速な浸透により新規の失業問題が発生し「ネオ・ラッダイト」と名付けられる反抗が発生しつつある。

このような反抗は社会の一部からは歓迎されるものの歴史を回顧すれば長期にはマイナスになる。やはり新規の技術を導入した社会への移行が必須なのである。その視点からすると現在の日本は危険な状況にある。スイスのシンクタンクが世界の69カ国を対象に大量のデータを駆使して各国のデジタル競争力、すなわち情報社会での国力を計算している。

日本は2010年代には20位前後であったが、次第に下降し、現在は30位近くに低下している。AIに係する国力だけの順位も発表されているが、日本は、11位でアジア地域だけでも中国、シンガポール、韓国、インドよりも低位である。AIが主役になった情報時代に憂慮すべき現状であり、躍進する戦略を構想すべき必要がある。

つきお・よしお 1942年生まれ。東京大学工学部卒業、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授。